

神戸女学院創立140周年記念行事報告

2015年10月12日、神戸女学院は創立140周年を迎えた。それに先立つ10月10日(土)、神戸女学院創立140周年記念行事が行なわれた。講堂では10時からの記念礼拝に続いて記念講演会が、エミリー・ブラウン記念館めじらウンジでは13時15分からレクチャー・コンサートが、図書館本館2階閲覧室と文学館ではそれぞれ記念展示が行なわれ、講演会終了後にはサイン会と学生ツアーマイスター16人によるキャンパス・ツアーがあった。

報告(1)

記念礼拝

10時から講堂において記念礼拝が守られた。壇上には、向かって左側から司会・中野敬一大学チャプレン、大門光歩中高部チャプレン、森 孝一院長、林真理子中高部長、斉藤言子大学長が着席し、舞台袖にピアノが用意されていた。この日は天候に恵まれ、講堂と第二会場となったホルブルック記念館合わせて約550名の聴衆が席を埋めた。オルガニスト・前田直子先生のオルガン前奏を聞きながら心の準備を整える。同窓生、旧教職員の顔も多数見える。一同で讃美歌434番の元となっている讃美歌「我の神に近づかん」を歌った。この讃美歌は神戸組合教会最初の讃美歌集(1874年)に第一番として収録されている曲で、神戸女学院創立当時から歌われていたものである。続いて林先生による聖書朗読があった。読まれたマタイによる福音書22章34節から40節は学院の永久標語

「愛神愛隣」の元になっている箇所である。この後、司会の中野先生から記念歌“Beauty Becomes a College”の歌詞がデフォレスト第5代院長作であること、作曲者が本学名誉教授・澤内 崇先生であることの説明があり、斉藤先生が独唱した。ピアノ伴奏は作曲者である澤内先生であった。そして大門先生が祈禱をささげた。神戸女学院に連なる私たちは神の呼びかけに応える姿勢を学んできた。多くの卒業生が光の中を歩んでいる。神の導き、多くの人々の奉仕と祈りを思い起こす。これからも地域に支えられ、喜ばれる歩みを続けていきたい、と。一同で学院歌を歌い、森先生の祝辞がそれに続いた。

まず、御来場の皆様への感謝と、講堂に入れなかった皆様にお詫び申し上げます。神戸女学院は1875年に創立された西日本最初のミッションスクールである。1933年に現在のキャンパスに移転したので、神戸時代58年、岡田山時代82年を数える。そして戦前、戦後ということを考えると、今年はちょうど戦前70年、戦後70年であることに気付いた。私たちが何を継承し、何を守らねばならないのかを確認したい。創立者タルカット先生、ダッドレー先生のお二人を何が日本に遣わしたのか。それは日本の近代化のためにキリスト教とアメリカ文明を伝えることであったと思う。「背筋を伸ばしなさい」というタルカット先生の教えは、先生自らのアメリカ文明の理解に通じる。アメリカ文明とは、自立した市民による共和制民主主義のことであり、これが即ち近代化の信念である。自由、自立を重んじる近代化の理解は明治政府の考える近代化とは違っていたが、先生方が目指した理想は神戸女学院においては実現している。戦時中は難しい対応を迫られた。政府への対応として奉安殿も作られた。戦後も危機はあった。GHQによる校舎接収の命令である。しかしこの時、アメリカンボードとKCCからの手紙によってそれは回避された。そして「背筋を伸ばした」自立して女性の教育を続けている。とはいえ、現在は、将来はどうであろうか。今の社会状況を見ると、信教の自由は守られるであろう。では自由教育はどうなるか。今後難しくなることが予想される。神戸女学院教育の根幹を守る覚悟が必要となる。先人たちの歩みを継承し、キリスト教教育と自由教育を続けていきたい。

一同で讃美歌510番を歌い、中野先生の祝禱、前田先生の後奏をもって礼拝を終えた。中野先生によるアナウンスのあと講演会の準備のため短い休憩が入った。

報告(2)

記念講演会

10時45分から記念講演会が始まった。「青春の神戸女学院 美しき学び舎がくれたもの」と題して、本学卒業生で作家、大阪芸術大学・大学院教授でもある玉岡かおる氏がスライドを用いて話をされた。飯 謙学院チャプレンの講師紹介の後、ピンク色の華やかな衣装の玉岡氏が登場し、学生時代の思い出を語った。

入学した年が100周年という節目の年であったことを知った。学生寮に1年間住んでいた。こうして約40年ぶりに学校にやってくると学生時代と同じ空間で同じ空気を吸うことができる。あの日と同じ温かさがある。これが神戸女学院の素晴らしさである。学生時代の歳月が何であったのかと問うてみると、歴史小説を書き始めてわかったことがある。あのときには感じなかった先人の足跡を感じる。神戸女学院の真価がわかるのは卒業後であり、あとでそれに気づいた時の衝撃は大きかった。神戸女学院の歴史という大河の流れを辿ってみたいと思う。歴史は学びではない。流れを知る、その中に居る自分を実感することであり、未来の流れをつかむためにある。明治開港後の先進的な錦絵に書かれた居留地と街中の高札の現実、宣教師たちの正しき正道を伝えるための困難、といった当時の状況の中で、神戸ではじめられた寄宿学校(のちの神戸女学院)の教育は、日本女性としての教養を大切にしていた。そして岡田山キャンパスには思想がある。ここには呼吸する建物がある。デフォレスト先生の“Beauty

Becomes a College”は美しい人生を謳っている。

玉岡氏は作家らしい物の見方で神戸女学院の歴史をとらえ、途中、卒業生の著名人を紹介し、自著の話も交えながら、予定の時間を大幅に超えて熱弁を振るわれ、12時25分、講演会は終了した。

お昼休憩をはさんで午後の日程に移った。レクチャー・コンサートに行く人、玉岡氏サイン会に行く人、展示を見に行く人、ツアーマイスターによるキャンパス・ツアーに参加する人などなど、参加者は皆、このあとと思いいの時間を過ごした。

報告(3)

レクチャー・コンサート

13時15分からエミリー・ブラウン記念館めじらウンジで神戸女学院創立140周年記念レクチャー・コンサート「スクエア・ピアノで聴く明治期神戸の演奏曲」が開催された。事前に申込みをしていた160名がコンサートに参加した。神戸女学院には1860年スタインウェイ社製スクエア・ピアノが現存する。このピアノは1890年に学校の音楽教育のためにとカナダの老婦人から寄贈されたものである。明治時代のピアノは現在よりもピッチが半音低いため、ピアニストにとっては弾きにくいという津上智実音楽学部教授の解説に続いて、4人の大学院音楽研究科2年生が演奏を披露した。演奏されたのは、かつて実際にこのピアノで演奏されたであろう曲7曲で、1曲ごとに津上先生の説明がついた。会場は明治の響きに包まれた(前掲「レクチャー・コンサート」参照のこと)。

記念展示

記念展示は図書館本館と文学館の2か所で行なわれた。

① 神戸女学院創立140周年記念展示「神戸女学院で学んだ作家たち」

図書館本館2階閲覧室では、2015年10月1日から30日まで9人の作家（由起しげ子氏、松岡享子氏、玉岡かおる氏、キョウコ・モリ氏、東直子氏、江戸雪氏、阿古真理氏、瀧羽麻子氏、高尾長良氏）のパネル展示が行なわれた。2012年度にご遺族から寄贈を受けた由起しげ子氏の資料展示を中心に、2階閲覧室の東側半分を利用して、記念講演会の講師・玉岡かおる氏、児童文学者の松岡享子氏など、それぞれの作家紹介のパネルと著作、作家本人からのメッセージが展示された。由起しげ子氏のコーナーでは、閲覧室中央の展示ケース2本を使い、ご寄贈いただいた貴重な自筆の原稿、日記を展示し、作家の人となりやうかがい知ることのできる展示となっていた。パネル作成には文学部教授で図書館長でもある藏中さやか先生と同准教授・笹尾佳代先生の監修のもと、文学部総合文化学科の10人の学生たちが協力してくれた。

② 文学館展示

文学館では4つの教室を使い、掲示板を用いての展示が行なわれた。L3教室とL19教室は学部展示、L7教室は大学生展示、L8教室は中高部展示であった。L3は人間科学部の卒業論文ポスター展示、L19はプロジェクターを使用して映像による文学部の卒業論文ポスター展であった。L7では大学の写真部と美術部合同の作品展示があり、窓の一部にスタンドグラス風の飾りが取り付けられていた。L8では中高部の元教諭3人の作品―山根勇先生の書、小川英紀先生の水彩画、大川徹先生の植物写真―が展示された。

由起しげ子関係資料 出品一覧

中央展示 ケース	左 側	『女中っ子』(1955年) 同テレビドラマ用台本 3冊 同映画用台本 1冊 『本の話』(1949年) 同校正刷 同自筆原稿 2点
	右 側	『罪と愛』(1962年) 『婦人画報』(『罪と愛』掲載号)切り抜き 同自筆原稿 『契約結婚』(1960年) 同自筆原稿 同テレビ台本 2冊 『やさしい良人』(1963年) 同自筆原稿
中央縦型展 示ケース	左上段	「マルゲリット・ロン夫人の思い出」(掲載記事) 山田耕筈のサイン入り楽譜 3点(ベチカ、馬売り、城ヶ島の雨) 山田耕筈の楽譜 1点(OTO NO NAGARE)
	左下段	山田耕筈のサイン入り楽譜 1点(澄月集) 紀元二千六百年奉祝楽曲発表演奏会(昭和15年12月7日)プログラム RECITAL ERICA MORINI(1927年5月5日)プログラム 「ピアノのある部屋で訪問記」(読売新聞昭和26年4月30日掲載記事) 「クロイツァー」自筆原稿
	右上段	写真 3枚(犬との写真1枚、フランスにて2枚) 「秋風と犬」(昭和34年)ラジオ台本 1冊 「ベキニーズのお里帰り」(「日中文化交流」1965年1月掲載記事) 最後の日記(1969年12月)
	右下段	ノート 2冊 『原水爆実験』(武谷三男、1957年)

(佐伯裕加恵)